

聖木曜日 主の晩餐の夕べのミサ

第一朗読：出エジプト 12・1-8、11-14

第二朗読：一コリント 11・23-26

福音書：ヨハネ 13・1-15

2025.4.17 19:30 ミサ

カトリック高円寺教会

イエズス会 アン助祭

共同体の皆さん、聖木曜日の本日、わたしたちはともに「主の晩餐」を記念しています。

「主の晩餐」とは、イエスが受難に向かう直前、弟子たちとともに過ごされた最後の食事のことです。この特別なひとときの中で、イエスはまずパンを取り、弟子たちに与えてこう言われました。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である」(ルカ 22・19b)。そして、食事の終わりには、ぶどう酒の杯を取り、弟子たちに渡しながら「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血である」

(ルカ 22・20) と言われました。さらにイエスは、「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ 22・19c) と、弟子たちに命じられました。このイエスの命令に従って、初代教会以来、教会は時代を超えてずっとこの最後の晩餐を記念し続けてきました。そして今、わたしたちもまた、同じ信仰に立ち、この聖なる行いをもにしています。それを通して、わたしたちは永遠の命の糧であるキリストの御体と御血によって養われ、神の命にあずかっています。

皆さん、聖木曜日に朗読されたヨハネ福音書にも、「主の晩餐」の場面が記されています。しかし、ヨハネ福音書は他の福音書とは異なり、イエスがパンと杯を取って御聖体を制定されたことについては語っていません。代わりに、そこに描かれているのは、イエスがへりくだって弟子たち一人ひとりの足を洗われた、あの出来事です。

弟子たちは、イエスが自分たちの足を洗ってくださったとき、きっと驚きと戸惑いでいっぱいだったでしょう。なぜなら、足を洗うという行為は、当時の社会では奴隷、あるいは身分の低い者がすることとされていたからです。まさか先生であり主であるイエスが、弟子たちの足を洗うなんて——それは弟子たちにとって、常識では考えられない出来事でした。けれども、まさにその行為を通して、イエスはご自分の深い愛を、弟子たちに、そしてわたしたち一人ひとりにも、はっきり示してくださいました。同時に、「互いに愛し合い、仕え合う」という生き方を教え、ご自身がその奉仕の模範となってくくださったのです。

かつてイエスはこう教えられました。「わたしが来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためである」(マルコ 10・45)。この言葉は、イエスの人生の意味、イエスの生き方をわたしたちに明らかにします。イエスの歩まれた生涯は、常に人々

のためにご自身を差し出し、惜しみなく与える生き方でした。そして特に十字架上で、その生き方がさらに示されたのです。イエスご自身のすべてを——命までも——人のために差し出します。その生き方こそ、愛そのものであり、イエスがわたしたちに示された真の道です。

どうかわたしたちも、イエスの模範に少しでも倣いながら、この道を歩み、自己を捨て、人を愛し、仕える者として生きていくことができますように。心を込めて、ともに祈りましょう。

皆さん、ヨハネ福音書では、最後の晩餐の場面においてイエスが弟子たちの足を洗われた出来事が語られていますが、御聖体の制定については一切触れられていないでしょう。これだけを見ると、あたかも両者が無関係であるかのように思えるかもしれませんが、実際にはそうではないのです。むしろ、イエスが弟子たちの足を洗われたという行為と、ご自身を人が生きるための糧として与えられたという出来事は、深く結びついているのです。すなわち、ご自分を人の糧として与えるということは、イエスがどこまでもへりくだり、ご自身を小さくされたことの表われです。それはまさに、弟子たちの足を洗うという、最も低い身分の者が担う行為と、まったく同じ精神によるものではないでしょうか。

今日から始まる「聖なる三日間」。主イエスの受難と死、そして復活は、まさに父なる神と御子イエスの限りない愛、そして深いへりくだりの御業にほかなりません。この聖なる三日間を記念し、特に主イエスの徹底したへりくだりの表れである御聖体をいただくことを通して、わたしたち一人ひとりがその愛に深く与り、主のへりくだりの姿を心に刻むことができますように。そして、互いに愛し合い、仕え合う歩みへと導かれますように、ともに祈りましょう。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>